
従者居らずの非日常

ルシフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

従者居らずの非日常

【Nコード】

N3884T

【作者名】

ルシフェル

【あらすじ】

それは非日常

従者が消えてしまった紅魔館

従者のいない時、紅魔館の人々の思いとは…

(前書き)

どうもルシフェルです

短編4作目

今回も東方です

ただ前回とは全く違う方向に書きました
どうぞみてください

ではどうぞ

そうそれは突然だった。

理由はわからない。

幻想郷の人間に聞いても誰一人としてわかるものがいなかった。

完全に瀟洒な従者こと十六夜咲夜ごやみち さくやがいなくなってしまった：

——
こうまかん
紅魔館
——

「……………」

紅魔館の主人、吸血鬼のレミリア・スカーレットは自分の部屋の椅子に座っていた。

しかしレミリアは座っているが、目は半目で口も半分開いている。もちろん呼吸はしているが全身からは生気が感じられない。

そうまるで『人形』のようだった。

しばらくするとカチャツと扉の開く音が聞こえる。誰かが入ってきたようだ。

音がしてもレミリアは反応すらしなかった。

来たのはもちろん咲夜ではない。入ってきたのはレミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットであった。

「ねえ、お姉様は今日もそんな調子なの？」

「……」

フランはレミリアに問うがもちろん返事など返ってこない。目を合わしてくれさえしない。

フランもそれがわかっているのか返事を期待することなく部屋を一周するような形で歩き出す。

「……」

「……」

無言で歩いている者と無言で座っている者。

ただ静寂の時間が流れる。

それに痺れを切らすのかそれともそれともこの状況への苛立ちかフランはもう1度レミリアに問う。意味が無いとわかっていても。

「お姉様はそれでいいの？お姉様はいつまでその調子でいるの？」

やはりレミリアは答えない。

それにフランは齒軋りを立てる。

と突然フランはレミリアに掴みかかり体を持ち上げる。

「いつまでその調子でいるのよ！そんな調子でいても現実はいらないでしょ！！現実を受け止めなさいよ！！！」

掴みかかったフランはレミリアに対して怒声をあげる。

肺から息を全部吐き出すくらい全力の声を浴びせる。

だがやはりレミリアは反応しない。

フランは終いにレミリアの体を揺すって最後には地面に叩きつける。さっきまで座っていた椅子も同時にこけてしまった。

「ハア…ハア……………」

叫び終わったフランは少し息を切らしていた。フランはしばらくして息を整えると今度は顔を下げて俯く。

「どうして…どうしてなの…」

フランは泣きだした。涙腺が決壊して多くの涙が頬をつたっていた。

「咲夜さんがいなくなっただけでどうしてそうなっちゃうのよ…。
私や美鈴だけじゃダメだっていうの…。戻ってよ、あの頃のお姉様
に戻ってよ！」

しばらくフランは泣きながら、レミリアに思いをぶつけていた。元
気になって欲しいと、戻って欲しいと。

そして数分後とまた扉の開く音が聞こえた。また誰かが入ってきた
ようだ。

「妹様…」

入ってきたのは紅美鈴^{ほんめいりん}だった。
フランのことが心配になってきた美鈴はフランの元かけよる。

フランはレミリアのベッドで寝ていた。泣きつかれて寝てしまった
ようだ。

目には涙の後が残っているのがわかる。

寝ているのを確認した美鈴は今度はレミリアの元かけよった。
乱暴にこかされた椅子を起こし、そこにレミリアを元々いたように

座らせた。

そして元の状態にした美鈴はレミリアの目の位置になるように屈むとレミリアに話をしだした。

「お嬢様、妹様はいつもここに会いに来ているのですよ。

お嬢様はそれに気づいていますか？

妹様はいつも元気が無さそうです。そりゃそうですよね。

咲夜さんがいなくなつて、お嬢様までこんな状態なんですから。

あつ、別にお嬢様を責めてるわけではないですよ。

ただ妹様は寂しいんです。

もちろんパチュリー様も小悪魔も他の幻想郷の人たち。

そして私だって。

早く元気になってくださいね、お嬢様。」

そういうと美鈴は立ち上がり、フランの元へ歩み寄った。

そしてベットで寝ているフランを抱きかかえた。

「お姉…様…」

抱きかかえられているフランは寝言でレミリアの名前を言っていた。それを聞いていた美鈴はさも母親…いや姉と言ったような笑顔で微

笑んでいる。

しばしフランの寝顔を見ていた美鈴は少しするとハツとした感じで気がつき、部屋を扉を開けて出て行った。

そのときのフランの顔は少し寂しげだった。

———紅魔館内大図書館———

「……」

紅魔館の中にある大図書館でそこにパチュリー・ノーレッジがいた。一人黙々と本を読んでいる。

しかしパチュリーの顔は目にはくまができており、顔色も優れない。

「パチュリー様、いくらなんでも毎日そう寝ずにいると体を壊しますよ。ただでさえパチュリー様は体が弱いのに……」

本を読んでいる彼女に話しかけてきたのは小悪魔である。

どうやらパチュリーはここ数日寝ていないようである。

それを心配して小悪魔は身を案じてパチュリーに寝るように勧めた。

「私は大丈夫よ。小悪魔こそ無理しちゃダメよ。」

「私こそ大丈夫ですよ。いちよう毎日睡眠をとっているのです。でもパチュリー様は…」

心配な小悪魔はパチュリーの必死な様子を見て、思わず涙を流してしまう。

理由がわかるからこそ小悪魔辛くあまり言えないでいたが、さすがに限界があるだろうと思って今日はパチュリーに話しかけたしだいであつた。

「…わかったわ。今日はちゃんと寝るわね。こんな顔だとレミイにも見せれないわね。」

そういうと小悪魔に心配しないでという小悪魔に今日はもういいわと言って退出させた。

そして図書館で一人になると物思いにふけていた。

何を考えていたかというとき夜のことにレミリアのことであつた。

先ほど本を読んでいたのも咲夜の情報を、そして何か探す方法を探していた。

毎日その研究をしていたが…いささか情報が少なすぎた。

本を読んですぐに頓挫してしまったが、それでも諦めきれずに探していた結果こうも寝ない状況が毎日続いていたのである。

そしてパチュリーもレミリアの元に通っては元気をつけていたが、フラン達と同じように効果はなかった。

そもそもレミリアがあの状態になってしまったのは咲夜が原因なのだから、本人ではないという意味がないかもしれない。

そう思ったパチュリーはレミリアの場所に通うのは止めた。行ったところで心を痛めるだけだったから…

「レミィ…咲夜…」

パチュリーの呟きもやはり図書館の静寂へと消えるのだった。

紅魔館の外でもこの話で持ちきりだった。

紅魔館の人が皆に尋ねたり、博麗の巫女も探したりしたがやはり見つからなかった。

博麗の巫女も普通の魔法使いも妖怪も精霊もすべてが悲しみに包まれていた。

どこに行ったのかと誰もが心配していた。

今日も行方知れず。

十六夜 咲夜の行方。

それは誰もが知らない未知の事件なのかもしれない。

幻想郷

それは一つの世界。

その世界は異変が起きる。

これは異変と呼べるとはわからない。

だが異変は解決できるものばかりとは限らないであろう。

(後書き)

どうでしたか？

この話書くにいたっては少し辛くもりましたがこれが自分の精一杯の作品でしたね

こっちの方向自分には向きませんわWWW

でも自分なりにがんばりましたので感想・評価・誤字等お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3884t/>

従者居らずの非日常

2011年10月8日04時55分発行